花鳥餘情

内閣文庫

内閣文庫

番號	和 20638
冊數	30 (17)
函號	203 / 2

国立公文書館
National Archives of Japan

花鳥餘情第十七　梅か枝

梅か枝

以詞為巻名梅か枝ハ催馬楽なりうた

西河事や　源氏卅九歳の正月の事

みえたり

おほんもきの事せりつゝく　あり

ひめ君の御裳着十二歳也とかおもひ

おそ文のうちにかきてそあり

春宮もおなし　二月に御かうふりの事

林氏藏書
淺草文庫
内閣文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

わかへけまとし
寿安ハ菩薩院の字
子ヒ年十二歳にて御元服ハ廿八日なりしに
下に入りて元文次泉院の二月の例を
模せらる
これらひのおやぢもと物かたりハ　故院なは
また三藩人への事物から本かたへきに
やらみあひのにやうらしかなりて二条
院の御入りよりいまれ次よへくは
しらぬ御事かや

そんとのれ御おりしおかた童されれ御ことを
そりしたをそんさしも展將字なり經
御かへりし河海によつて謙によ言葉を
よろ字を王の草字によみやしてそれ
皆よかきそそのしら文をしよみ老
ゑゑかへりし文そしをそんとよめきか
ハ此御うりよ御縁と御そらしとつきた
る萬の字をそんとよあつかひ文かたう
ひかし故によそんかりしともそえうさと

心得へきより承和ハ仁明天皇此年
鏡ハ二の方しいかなることしと伝ふ
とめ二ふり
（是れて）えんもんりしけつれてたゑう出かゝり而きり
ひとしんゆくけ志すゝともにて

放出事　李部王記天暦元年
正月二日於大皇大后御所院柏殿西對
南放出母屋敷之王卿座南小對鋪以西
為上東廂西向南上敷四位座ヲ又天暦元

年三月九日東遷幸朱雀院其殿
北廂東母屋放出南辺對鋪為王卿座ヲ
各畳上ニ敷枚加茵　太上皇ハ東向今上ハ西向　又天
暦元年三月十六月太皇大后ハ柏殿ニ
設法花八講十七日参ル朱雀院其殿
放出安置佛像列供具東廂敷八僧
座ヲ　又兼年七年十二月十七日陽成院
七十御賀ハ正殿西放出ノ三間立螺鈿倚
子ヲ　小右記ニ永観元年正月二日中

宮大饗其儀二条院東對南放出三間儲
公卿座其上對座立臺盤母屋懸御簾庇
不懸之四位侍臣座ハ左南廂西上北面右
以此記加料簡有謂放出者南面母屋之
若也 河海曰廂ト者誤也 所詮寝殿母
屋南北中央以東ニ陽之所謂子之
裏ニ也 或以障子為陽 以南方為放出以
北為門方南放出中之帳臺有事ト
附撤之次東放出西放出ト云者正殿中

央東西各有厳謂之東對西對之寝
殿与對之間有透渡殿不及對屋作之
時东西構公卿座子午ゝ中門ト作事もは
きうのと對代といふ 东西對の代ゝ故
東對母屋とも放出ともいふ西ニ准し物語
若菜下云南の放出にて西の放出に御座
まうけて上達部の御座は南のひさしにつき
玉ふ 又云若菜上寝殿の西の放出に
御帳たてゝそなたの一二の対などいふ殿

しけて女房のはう○して又六條なりし人
すら出して例のきゝひてしらせん乃いて見え
より右ゐ給ふよいふ所ハみな六条院の事也
これにても殿ハ南面の女屋とみて侍り
されはまつ此殿をといふなりの對の殿
とらんや梅つえの君のひんかしの中
此殿なとハ東の對の女房や中といふ女
房し扇とのあまた御帳をとりて侍ぞ
給まてむ源氏をたてゝふみと浮の殿出ハ

いひしさて此多くの人々も世話せ前ハ六
条院の東の對のそうかせ源氏の君
もさ時寝殿にも御通ほとの御
てわたし世話せ見えさりこれハ
西對の殿出してはた世話せ前ハ六條院
の東の殿もかしこそ源氏の主ても時
寝殿又よそれまた折にて御かたわた
給はり見えさりこれハ西對の殿
出してはた世話せ前ハ六条院の東の

ともからひそやし源氏の君かしはけ寝
なよゝる建物もし御してゐも住ゐ
よしかくよりこれハ東対の様也そ
河原の世話にはしらるけれ此河原の院
東三条をいふなりや又このなりけり
西の前めしいへハ西対の様也けれ
こまをとり河しせて所もとへき也
六条院ハ対屋二河原をとミてより
八条の所ハ宮の家の御ゐをはらへてる

八条
凡そよていふと河原もありし
或ゐにハ康親王ハ仁明天皇の第五皇
子也従四位上治部卿温子参議員王女之
源氏の君此河原の院をまうし業平の
たうとそし此の里にふるはまてそ
兼輔の御時まりしか此ハちかうすれハはく
河原の御まもい一みなかゐしみすえしハ
たまの住むれとも源氏の君にて家の
人の宮所よりて加賀はり河

よりて源氏よ了りたれ給ひし
八条式部卿の宮は其の父式部卿宮なり
兵部卿にて御ありし又匂兵部卿宮と
羽林の中将にかしかれ方よのせられ
も其ものとる統に立てむや立てれ給ひて
源氏君の給ひしも源氏のもとに於ひと
のうしていうそなりてに法を人をば
ろうろるや
かしこれ給ふこともののやう法ふれあるさ

或説云東廚子の内の上に香壷の菩
二合下腰に葉の苣二合其の苣の合は
背向擬与て円角なる苣 纔納物と并
見壷苣に銀して蒔壷の大なるは
壷と入る二合に入り並物と細料や山
並物は梅花荷葉侍従黒方とて納紙
の壷の中に雲母壷入へし錦物並
入りいさよ白針に白汁粘の生れ物せ
表指しまるしうる入て置二入帷業

筥二合折立同じく　一合ハさきのごとく
かの壷三ゝ入れさうらわのまへにあり二
合にしろかねのひもしてあり猿の
飯器の具ハ桶に露のひもつけ若
茣もしきいとをさく　通ふりあらひ
ゝののふたに生れ物ともつけ若納ある
筥と桂の方にはつゝと御まいりて　一
雨にせよも入桃月年　西一厨子の〻
乃勝よ造紙筥二合打立あり植ゝの

造紙にり二合すゑらる　切角丸筥や
下勝よ櫛筥二合丸角ゝ出櫛懸
子ふ硯あり　打立にり　二棚毎
屋祠房東西一厨子のよ筥八合にり　其中
二合ハ香壷丸筥ゝ東厨子丸上下とく一
合よ薬壷ゝ小つて入て　極也おかの種ゝ筵
物雲毎壷ゝその中よ行るとしいつりきゝ
ハ退後に用ゝ一肢のゝへよいたんるみ
打ゝへ――　二条大納言入道資家　母光の

はしれもこれもの源中云葉の哥にハ
紅雪紫雪かりろくのんらかしと大臣
出ひつこれよ左はかミとて大酒給す
もとつ孫れ源いとハ永久の御例成のし
五水精まてはこそつの葉れ哥よハ去る
い物へ源のやし好つ物ろきうのとうけ
給し紅雪みてやんれ葉うし出れハ
けハさりけるやとせりハこき紅雪出雪
ハ中堂よほうりして加らして入寺と承

例なるもけしやうん永久の御こと哉
哥よハきらつの一すぢもめつらしきを入
て作しをいのふにとらん出てしけれ
けさらしのそこよハさ而くの風流
なくとはそりつまてかくするもなかさ
月記よハ永久にし永久のよハさやの御
ハみゆそことに給のなしるさる紅
御のなつとけるなりしもてしつひそみ
けしんらしてし女院御のりにけかり

二枝つゝとりつきて○そいれもゆりんと
うけ給はり大かたいふやうしのそう
といはれよりハうち紀抑そはしめて
物ぞん寺氏入道志あそられてよろ
かゝし草紙てはと申やまゝくいて書進し
いわゆりん花山の入道ゆかりほうよ
菊花のこのうしも悦けてハしと哉
定人
心葉こん海のまふかめてし此枝さしたるきよふ桜

とえうきて此寺しくひさしきひらういよの
海も
西宮秋菊花宴御膳具
心葉岸也開作細工 今案心葉の松
梅も折枝のやうよりのありてえり
多ゝの物や
こゝちいかゝ様の加ゝれかそのかへころ
女のきぬそへ河也経　紀梅の唐織
物の細ももに海よ、香細もしあり行
やまれのや　女の紫衣はもかゝきあ

めてたかりしや
はなもその名にかゝりて
乃とや其の名にみとり
角しく出かりこそ
とめたのやあらしいなや
はすの池にそよ
つのよ秋池への はなかよとりきて
岩ねに宿るよりこれ名月や
月さき人かりつゝてもよ中なる月夜てさも
鈴木つきよ
かくしと
源氏の笛に

夕を待つりそと
鳴くしゆひよ秋の半分と彩露もし
ゆきんと出羽をすり
あし羅も 折かり秋之 秋の名流すれ
中秋すそあすり 月へて 月なり秋し 出羽
よしや
出その陣に みか名にかゝりよ夕すゝへて
みよのさとの下より はなみきえら
うら川さも月つると
好兄に沙り紀君
或於に 云衆

浣よりさいはつゝ躑躅のつき二あるか中
よんは侍躑躅よりは若葉の様白きは櫻と
えりてといへり萱草をとらむみすれと
をとらぬれは梅も梅のりし菊花は
こさくのあにらむときましせり望事
といふをみそるきにまとるとかくせるを
これも緋はくろき色なれはこれと色き
ふかくとせりけれ松は吹香よかはのゆて
百年もとなれもしかれその萱草によき海

ほのみえ真松は葉の色もされおの家
とのみをとりちて松かも古人の望事と
感ある詞は此何ともなし免されこ
引の時にくその句の色官よ封される
色といへり大きいは萱草によりかり
本なれとそ松よりそこへれけれ
色はのへ代かのさ引の中に梅もちるかに
いろかのくすらしとさやこきん色らひ
とこへくぞ然つりしきつかりくてそこもてし

句の入乃萱殿ハ八条式にて成
作者里言の前より梅花と合せ給ひけり
かの二代とこそハ不仕男といふ尊氏経
のあとをせ給ひて かな手ハにくれとし梅花
いけくと見えけれハ書くと判し給ふ所也
れハ二の句とさしとききて判者の家ハ
梅花と判じたまひつと判し給ひける
寛教僧都の流に用ひて書き遣はし
下さくとしてくされけるやさきへし

さひとききつらしけてこらり
加茂りと一人さいへせ給ひり 定家卿
くたされも莵玖ととかくせ給ひて見よ
せ有のにみつり
氏えこうへ仍てハ此と云れけるハさ給の先
蓮阿のとうすせ給ひ忠給候のこしく
にえこひ川っまつつけ 下腹の
ちうなりしこひえて 其後の細かの
またの意所り 江海よ云えてハ以其の

薫衣香百歩香をまはれうりひして云
ましへ毎のとしいへりけるなれバかし
此人のはしやはかバ薫衣百歩乃
二をとりあはせて新しく方箇
出せるまやされはいふくし出かし侍り一
まいは前朱雀院は義平の御時の者は
公忠朝臣もその世にはへてはかせるよ
集つまちんつや　前つよ朱雀院の薫衣
香といふは是家ちら公忠朝臣のくれ

御つまりの帝と朝臣しるりや　百歩香
なりといへ共此方よりそれ　香製の多く
三ミこゆめのとありて　百歩香といへ太
一方まで作られしうさか　合せり百〻八朱
雀院の　薫衣香と公忠朝臣の百歩
香と二種をとりしの人　あはせ朝臣と
人々へ一百歩ハ宇多天皇御家よ
足知ラウよしみされとも和百歩
香しなる出給れとものしかれ是はの前

これも公忠朝臣の名でまかりけるとも
うたよみまはりけるにこそえてといふ
詞ハ物名集なとハこれもまかりてあ
つまりつくりと故にはりしのといふこゝの
二の方に出してはりても紛れたるとて
えてとふいふやし前朱雀院ハ萬年
御門のはりのや　西宮撰源明部　公前
朱雀院御出大内之時棄金錺横柳
とゝ此前朱雀院ハ宇多御門のはりなりや

萬年御門と朱雀院と申はゝつき宇
多天皇をとし前の字をそへて申侍り
此物名にハ又朱雀院御しまたと侍り
て萬年御門と前朱雀院と申やこの
御はしに見えねは　並物方なしとそ侍り
し疏なり
月をしいそねまほ　上氏詞によきこと
き十月としあり河海に二月卯とある補
違なり

ちしかあそしのんかくされけるなかりきこう
たひし　君なり　さゝまの名よあり
家もみさしもさしいてしなりて御心
常乱きまやいてしおくうさん心をあつむ
のあるりよ　さるひとの声は郢曲なれ
まし心をあつかは花鳥の道のまやし
うひすの鳴くされ枝もうひくもてなくと
やきと鈍せしんの　笛竹
桐中物よ向しまもし笛竹とあるを　次中おろ峯

んありて風のよく鳴る竹の本よさりけ尾
ねまて常うやよりくまの　風さへ心
してちしきなる竹ともやよりくきし
ら鳴んてし峯松中ねよろ横笛よくまと
よあつきそしけの調よあさけなくとて
うけり
露くに月と花とくとへさそともに鳴くされ
名も　かへろひかの　名なれわたる
かつはおしたくはしめてすゝくんなり

年おほ猶えまかなよつきて猶く
らの君もほころひうすきしとはなき
いまさ将みゝきはまりてあるはな
らぬしや
もの音とえすゝぬ袖にもつしてこと
けやまりしいりやとふあむこえ
うちや縁すゝぬ人世もうきる
ことむしろやともひ給　若き
海すき

いにしへもあまたあるよ　かゝりける
多くもうしろ心ありけり
宮の私もしむとみ此もれうそと
西の対此もうち也秋好中宮の
海ゝまれはこや
かゝる所の儀よ紀はよろしきこれにと
事ありくよろしきとふもれ
中りり字の事は中くのこと
も海接ひそれかりすれも大

くいちかひと云ことあるも
このやさくのひめ君より 還座し
はしきてらし 花宴なとにも万葉
よまぬもあり
かんなのはしめんはしの世よりいてきしはなく
なりけり との世此假名も弘法
大師始作之以前假名ハ如日本紀万葉
哥ニ書惟日本紀も假名書之万
葉集之以音与訓与義書之

とありてこそ あしよりハ奥やし
昔によりてこそんでしよりハ所へしまよ
ありても分らぬ事なり
よ義有ありてみなひそとくありりし
はしれよもハまつ学心のひかの
物してよつきてん書曲りしくまて
ゆきてつらき所おまても能信ハとの
はしとそ後ともしめしらく
しのきそもよくもしあれともみ段

かうきりのくし

およそこれハ物語絵にあり　此一段ハ

むしろ絵のかくよりゑかきのや

まことに女の親し笠ことの絵かや

いつかたにても絵を　すこし絵を

をいあらし　か御所んしかもそことらへ

御しかのすみつくり絵よかすてしきけ

なまさりしこそすまじろなれ　まん

かのことすへうつゝも事にて

第にうきさらなとハつれハうたくともくんと

こゝろありかゝるとそのやうによかすきと

くさは無けるゆかさく文字のやうなり

かうへきんや

きさらねさしもし　書物と号は

あとハ之ハしよふく門典知典

のうの小も巻第一巻第二のとりに

和記仍は書物と先知めてあるし

斎し記して以前ともうりて　以上

うりとてハれもしまさまもしいかゝ
こゝろし　伊勢物語の詞しこゝろハ忠
上手の絵かや
わしてうた絵すまと亡ひくはうけられ
毎へとも　けりての名筆もわしれは
のすりにみ字すとうくし　紫式部かきの
うつみもつきうけや　中津和尚のさて
みれもうきと云文字の術ハさくの筆か一
似ろうこしとさかや

いかにそやすしえりいそ絵かは　山崎よ
さ梅ふ二三人の女房よそのつたハいかた
けりしそらうの絵かみや
考ゝ三くさりとうらは　す一首とこり
もうたにくとうえみさうしの根とた
三行てつき絵つうれいろまても　如過ゝ
へし
箋すけつへしや　班超投筆硯歎
曰大丈夫當ニ立功ヲ異域ニ以取封侯ヲ安ソ

能々文字ニ筆硯間午ニ　七案筆と紙
しる紙しみすしくて物をかりよいろかるハ
かゝるへし
凡歌ハ人の深さへ乃くるにつまれ有る
獲麟の一句ハこれをとかく人の深くといふ見ん
絶ハ人の深くとするを以て良れ一句れ於こ
ていふきね爾やし　る々まハ多くの絶紛あん
筆絶をとるて日本よ風姿をとりよ望
筆ニよ調をとりてよろし

さられみかとの古万葉集をえらしひらもせ
給へる宣奏　万葉集一部廿巻平城
皇詔侍臣撰之見古今序又万葉抄
孝謙一説紀貫之　一説梨壷五人抄之
同廿巻抄不知撰者名此外嵯峨御撰
四巻目六中不見但ら皆りつき撰定の
抄まていふてもよれ多あに而しえる
ひらもせ給へるみや承わゐへし
延喜乃みかとの古今和歌集をえら

延喜

此御代に撰せられける和哥集なれとも
なからの宮方もあるやうに入り侍れと
ハわかつゝうち書侍り
かしこみのひも　唐織や
わかれのなみたみしかくさしいりて　御杯
臺によそふのやし
せしおやしつきたかき宮すれ　源氏
此君は名号にてるまゆやも
かるしの事はしく紀伊くるしつまされ

去ぬるみ人々も　古れよりハ源氏の君
此名号と教訓し給ふやうしころさ
ちとせへしても源氏のむかしの此桐つほ
の御門此御はしもと色をそへとや古ひ出
給ふや
侍進しと物にれたりのいんの御事
父藤兵法界までおれと心よせ
さらにかといへのとしきりうつまて
いとさうくりをと言めとらうけりせの出て

源氏のとうの中将との給へ
とう中将やまうでゝ見ん人のとうの中なれば
と渡　これハ一条みやす所なん人ゝとまふ
よかうそとも[illegible]ひ人しても見えれん
うたゝけはつゝんぶなんなり
女もは源給なり　これは中との[illegible]ひたけ
き給つかいは南帝しきよ　これは雲井
房なら筆文中くのすけき給ひて
中ゝれなるは給の給へしよ　源氏[illegible]

[illegible]給し　は致仕れねられらけひき給
もさうしいつ也
多らぬうさゝりもやそむしちゝうゝある
処給　致仕の中ゝの多らでとうは近と
かへりなん[illegible]なりれ女君は[illegible]なし
給なり
はれし心をぞれてもすゝ出つる源なか
雲井の房れご給うぬ也
衛親ならりもかとなね[illegible]まいさよと

源氏の君か舅よこしまにとゝりわくと
おもむき給ふなりと吉き給ふなりけり
まつ花とか舅のまへ給ひけりけれは
なをとうめしくさ給ふやし
かきりとて別れかなしきとさすまもこ
やふれなくひるかなりん　舅君よ
さすれなへやへよこたかしいのふう
きそさそれなくさ給ひんなれと
とかきりあれなさすれてもうかなれ世

よきさうすくひなれたうみとらとも
おもし雲井の後君給ふよりこと給ふに
うちくのおくましれおの事にとは
のめしくう翔しそれと又舅乃君ハ
にもさり給ふれはあれはしうれにふち
とやにやうさ給ふやんとあやし
とおひてうらみとゝ通ひとて袖さえ給
へりしれうきとうやし

内閣文庫

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan